
私とパロさんとトロールのお話

yutaka_kinjyo

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私とパロさんとトロールのお話

【コード】

N8401X

【作者名】

yutaka_kinjyo

【あらすじ】

読み切り短編ファンタジーです！ 童話風に仕上げてみました！是非読んでいって下さい！

昔々のお話です。

ある日、おばあちゃんが私にお話をしてくれました。

「いいかい、よくお聞き。決して森には近づいてはいけませんよ。森には恐ろしいトロールが住んでおる。トロールは森の植物を食べ、動物を食べ、人を食べるんだ。おばあちゃんのお父さん、そうだねえ、ギミーからだど、ひいおじいちゃんだね。ひいおじいちゃんも森に行つたきり帰つてはこなかったんだ。」

私はそれを聞くとズンと気持ちが悪くなりました。なんと悲しいことでしょう。なんと森は怖い所なのでしょう。おばあちゃんのお父さんが食べられちゃうなんて。さぞかし怖かったですよ、さぞかし苦しかったですよ。私は森には近づきません。そんな怖いモノがいる森なんて、行かないと誓つたのです。

それから何日がたつてでしょうか。その日はとてもよく晴れた、清々しい日でした。旅人さんが私の村にやってきたのです。話を聞くとその旅人さんは、なんとあの森を抜けてやってきたというのです。私はとても驚きました。でも旅人さんは恐ろしいトロールなどいなかったというのです。私はホッと安心しました。きつと運がよかつたのでしょうか、トロールに見つからなくてよかつたと思ひました。旅人さんはパロと言いました。それから何日もかけてパロさんは今まで旅をしてきた、胸がドキドキと、心踊るような、素晴らしいお話をたくさんしてくれました。西の国の、国民全員を笑わせることができる、愉快な王様のお話や、北の山で出会つた、私の3倍の背丈もあるという大きな熊のお話。東の村では虹の麓を見つけ、南の

砂浜では頬が落ちるような甘い甘い果実を食べたそうです。私はとても楽しい毎日を過ごしました。世界はたくさん素敵に満ちているだと思いました。

そんな楽しい日々はあっという間に過ぎてしまいました。パロさんはまた次の旅に出てしまうというのです。もつと東の大陸に渡るそうです。とても悲しいことです。私はいつもまにかパロさんを好きになっていました。パロさんも私を好きだと言ってくれました。私はパロさんと離れたくはありません。でもパロさんはどうしても旅を続けたいといけないと言うのです。私はムンと体を張って決心をしました。大好きなおばあちゃんにお別れを言って、パロさんと旅に出ました。そして森へと入っていったのです。初めての旅と、初めての森と、初めての好きな人と、私の心は、不安で、怖くて、嬉しくて、ドキドキしました。とても不思議な感じがしました。

森を進んでいると、なんとも大きな体で、なんとも大きなお鼻で、なんとも大きな牙をもったトロールが出てきました。私は怖さのあまり体が震えて動けなくなりました。なんということでしょう。あの恐ろしいトロールに見つかってしまいました。

「ぐおおおお」
とトロールは大きな声で叫ぶと、私の2倍はあろうかという手で地面を叩いて、とても興奮した様子です。そのお口からは、ボタボタとたくさんのよだれが垂れています。パロさんは震えて動けない私の前に立ちました。

「大丈夫、僕が守るから」
それを聞いて、私はさらに怖くなりました。パロさんが食べられてしまったらどうしましょう。私のひいおじいちゃんは食べられてしまったのですから、またそんなことがあってはなりません。

「ぐおおおお」
トロールがもう一度叫ぶと、パロさんへとその大きな手を伸ばしま

した。パロさんはそれをヒラリとよけると、トロールは自分の勢いでシリモチをつきました。その隙にパロさんは私を担いで近くの木の影に逃してくれました。その後すぐにトロールの元へ駆け寄ると、まるで蝶のようにヒラリヒラリとトロールの周りを舞いつていました。トロールはそんなパロさんを掴もうと、下を向いたり、右を向いたり、あつちへいつたり、こつちへいつたり。ついには目を回して倒れてしまいました。

「さあ、今の内に行こう！」

力強いパロさんの声で私の震えは止まりました。差し伸べられたパロさんの手をとって、私達は駆け出しました。トロールの横に通りがかったその時でした。私は不思議な声を聞きました。

(・・・苦・・・シイヨオ、寂シイヨオ)

どういうことでしょう。その声はトロールの方から聞こえるのです。私はパロさんの手を握ったまま立ち止まり、耳を澄ましました。

(独り寂シイ・・・ヨオ)

間違いありません。これはトロールの声です。その時に、ドツと私の心にトロールの悲しみが流れて来ました。トロールはずっと独りこの森で暮らしていたのです。友達も家族もない、好きな人だっ
ていません。なんと悲しいことでしょう。誰にも気持ちをおわかってもらえず、怒りや、憎しみ、絶望や、寂しさがトロールの心にいっぱい溢れていたのです。

「パロさん、私は一緒には行けません。トロールの声が聞こえるのです。悲しい、悲しい声が聞こえるのです。」

パロさんはとても驚いた顔をしましたが、すぐにその瞳に何かを決

心したような火が灯ったように私には見えませんでした。そして次の瞬間、私の心臓は飛び上がりました。パロさんが私をギュツと抱きしめたからです。その瞬間に、私の意志とは関係なく、足がガクガクと、体がガタガタと、こんこんと、どんとんと、私の両目からは涙が溢れてきます。私は我慢できなくなって、トロールのように大きな声で泣きました。パロさんの匂いがします、パロさんの温かみを感じます。この感じはなんでしょう。とても切ない思いが私の中で爆発しました。パロさんとの旅はとても楽しみだったけれど、何度も何度も、素敵な世界を二人で旅する夢を見たけれども。それでも私はトロールを置いていくことができません。私にはできないのです。私にはできないのです。トロールの悲しみと、パロさんへの切なさが津波のように私の心を駆け巡りました。

どれぐらいの時間そうしていたかはわかりません。どれぐらい泣いたかわかりません。

「君にしかできないことだ。僕が話した世界の話を上げてくれ。少しでもトロールの悲しみが無くなるだろう」

そう私の耳元でつぶやくとパロさんは、私から離れました。ふつとパロさんの温かみが消え、冷たい風が私の体を包みました。パロさんはトロールへ一礼をして、もう一度私の方を向いてこう言いました。

「世界を旅して、必ず戻ってくる。トロールの悲しみが消えるような素敵な世界の話をもつともつと、探して戻ってくるよ。だから君は君のやるべきことを、君が信じることをすればいい。待っていてくれ。必ず帰ってくるよ。」

力強いその声に、私の涙はようやく止まりました。なんだかとても勇気が湧いて来ました。私はムンと胸を張って、しっかりと立ち、首を大きく縦に振りました。パロさんもそれに答えるように、にこやかな顔で頷きました。そしてパロさんは旅に出ました。

あれから何年経ったでしょうか。私とトロールは随分と仲良くなりました。トロールの話では、私のひいおじいちゃんも、私と同じようにトロールの声が聞こえたそうです。そしてその寿命が尽きるまで、トロールと一緒に暮らしたんだと教えてくれました。私はそれを聞いた時に、ひいおじいちゃんもきつと私と同じ気持ちだったのだろうと思いました。ひいおじいちゃんと同じ気持ちになれたことを、私は嬉しく思いました。さて、今日もトロールに世界の素敵なお話をしてあげます。西の国の、国民全員を笑わせることができる愉快な王様のお話や、北の山で出会った、私の3倍の背丈もあるという大きな熊のお話。東の村では虹の麓を見つけ、南の砂浜では頬が落ちるような甘い甘い果実を食べたお話、それに東の大陸のお話です。

おしまい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8401x/>

私とパロさんとトロールのお話

2011年10月23日04時17分発行